
ある雨の日に

誠一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある雨の日に

【Nコード】

N8373L

【作者名】

誠一

【あらすじ】

もうすぐ25歳。年齢〃恋人いない歴。そんな主人公がある日恋に落ちる。この恋の行方はどのような結末を迎えるのか。青春時代をもう一度味わえる、そんなラブストーリー。

第一話 出会い

あの日も雨が降っていた。雨の日は嫌いだ。じとじとした一日。汗ばんでいるわけでもないのに、体中じっとりとしている。そんな日は決まって家の中でパソコンと向き合っている。外に出かける気にならないのだ。オタクというわけでもなく、引きこもりというわけでもない。ただこの日だけは面倒で仕方がない。そう思ってしまうのだ。

晴れた日には喫茶店にいつも行く。そこではいつも400円のコーヒーを頼む。コーヒーが好きなのではない。おかわりが自由なのだ。そこでコーヒーを飲みながら本を読むのが好きだ。そこで過ごす時間が好きだ。自分だけの世界、自分だけの冒険、自分だけしか知らない何かを探すのが好きだ。人付き合いが苦手な自分はどうしても自分の世界に籠りたくなる。誰かが悪いわけではない。誰かに何かをされているわけでもない。ただ言葉にするのが苦手なのだ。

そんな雨の日に出かけたことがある。何かしたかったわけではない。誰かと遊ぶ予定があつたわけではない。なぜか外に出たくなつたのだ。だから僕はそんな雨の日いつもの喫茶店に足を運んだ。いつものようにコーヒーを頼み、いつものように本を読み始めた。何かの拍子に窓際を見てみた。外は雨が降っている。特に変わった景色があるわけではない。しかしなぜか目を奪われた。そこに座る人があまりに美しかったから。つい見とれてしまったのだ。どれ程の間、目を奪われただろう。わけもわからずボーっと見ていると、ふと目が合った。気まづくなり、本に目を戻した。変な人だと思われるに違いない。あんな綺麗な人が恋人なら、、そう思ったが、すぐに考え直すことにした。自分は口下手だ。それに一人で過ごすことが多いせいか、楽しい遊びもよくわからない。恋人にできたところ

るで彼女を幸せにできるはずがない。楽しませる術を僕は知らないのだから。そんなことを思いながら店から出ることにした。本に集中できなくなっただけだから。完全に心を奪われてしまった。会計を済ませ、傘を取り店から出たところで誰かに呼び止められた。

「あの、、、」

普段、人と話す機会が極端に少ないせい、ドキリとしてしまった。振り向くとさらに驚いた。先ほど目を奪われた女性だ。よくわからないまま「はい」と答えると彼女はこう言った。

「これ忘れていますよ」

そう言っ、て、彼女は本を差し出した。読んでいた本を席に忘れてしまっ、ていたのだ。「すみません」と返答し、本を受け取る。

「この本、おもしろいですよね。私も好きなんです。」

「じゃあ私はこれで」

再び喫茶店に戻ろうとする彼女をつい呼び止めてしまった。

「あの、、連絡先を教えてください。」

僕は何を言っているんだ。

彼女は一瞬怪訝な顔をしたが、すぐに何かを紙に書き出した。

「これ、私の連絡先です。」

そう言われ、その紙を受け取る。

「すみません」そう言っ、て、逃げるようにその場を後にした。

完全に変質者だ。なぜあのような行動に出たのかもわからない。しばらく自己嫌悪に陥った。僕はバカだ。

その日の夜、昼間の彼女に電話を入れてみることにした。神谷翔子^{かみやしょうこ}。

それが彼女の名前らしい。番号を押す手が震えてしまう。こんなに緊張するのはいつ以来だろうか。ドキドキする気持ちを抑えながら通話ボタンを押す。

トゥルルルル・・・トゥルルルル・・・

さずがに出るわけがないか。そう思っ、て電話を切ろうとした時、電話が繋がった。

「もしもし・・・」

まさか出てもらえるとは。いやいや、知らない番号からだ。出ても不思議じゃないだろう。そう自問自答を繰り返しながら、、

「あ、もしもし。えーと、昼間はありがとうございました。申し送れました高瀬と言います。あ、高瀬雅也たかせまさやと申します。」

「やっぱり！昼間の方だと思いました。どう致しまして。渡せて良かったです。高瀬さんっていうんですね。そういえば自己紹介もできていませんでしたね。私は神谷翔子と申します。」

良い子だ。素直にそう思った。これが普通なのかな。こんな礼儀正しい子、なんかいいな。そう思いながらも会話が途切れることなくくだらない雑談をした。どのくらいの時間話していたかわからない次の日も、またその次の日も電話をする仲になった。幸せだ。僕はそう思わずに入られなかった。この人と街を歩いたらどんなに幸せか。いつ死んでも本望だ。そう思った。

ある日、僕は彼女を食事に誘うことにした。もちろん、もう一度会いたくなったからだ。

「僕、ラーメンが好きなんです。入ったことないお店がありまして、、よかつたら今週の金曜日に一緒に行きませんか？」

なんでラーメンなんだ。彼女もそう思ったことだろう。下心丸出しだ、、みつともない。

「え、、ラーメンですか？そうですね、、いいですよ。」

「じゃあ前お会いしたあの喫茶店に近くで、、時間は午後7時でどうですか？仕事が終わるのがそのくらいなので。」

「私もそのくらいの時間なら大丈夫です。じゃあまた金曜日に会いましよ。というか仕事されてたんですね（笑）」

「実は仕事してたんですよ（笑）隠してたわけじゃないんですけどね。システムエンジニアってご存知ですか？パソコン関係なんですけど、あんまり良いイメージがない気がして言わずにいたんです。」

「あ、SEですか。お仕事大変なんじゃ、、、7時って本当に大丈

夫なんですか？」

「時期にもよるんですが、今はそんなに忙しくないなので全然大丈夫ですよ。神谷さんは仕事大丈夫ですか？」

「ええ、私は警備会社で経理をしているんですけど、いつも6時には会社を出れるんですよ。」

「それは良かった。経理さんだったんですね。お金の管理に杜撰な僕にはとても出来そうにないなあ。」

そんなとりとめもない会話をしながらその日は電話を切った。毎回そうだが、オチがない会話だ。何か言いたいわけじゃなく、ただ思いついたことを話しているだけだ。それでも会話が続けるのが嬉しい。相性が良いとはこのことかもしれないな。そう思いながらその日は寝ることにした。金曜日が待ち遠しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8373l/>

ある雨の日に

2010年10月8日21時31分発行